『狭衣物語』「衣」考
――喩としての衣・形ある衣、「狭衣」の起点と行方――

土井達子

はじめに

『狭衣物語』は数多の衣に纏わる表現を持ち、また、女君自身や狭衣と女君との関係を、それらの表現が表わし、かつ物語の展開に関わっている。[1]その中で、「狭衣」の表現はどのように生まれ、どのように引き継がれていくのであろうか。また、現象としての形ある衣と喩としての衣の在り方の問にはどのような差異や関係があるのであろうか。

一、「天の羽衣」――『狭衣物語』前史

この物語において、「狭衣」という、喩としての「衣」が物語の根幹を語る役割を果たしていることは、もはや言うまでもないが、まず、その喩としての「衣」が言説として立ち現われるにあたって、形ある実物の「衣」の登場によってその喩が引き出されるという、「狭衣」の原点に注目してみたいと考える。ただ、実際の「衣」とは言っても、それはいわゆる「天の羽衣」であって物語・伝説上に見られる「衣」であったという複雑な様相も加味されるところである。

楽の声、いとど近くなりて、紫の雲たなびくと見るに、天稚御子、角髪結ひて、言ひ知らずをかしげに香ばしき童にて、ふと降りゐたまふと見るに、糸遊のやうなる薄き衣を中将の君にうち掛けたまふと見るに、…（巻一、上・四三―四四）

五月の「むつかしげなる」空の折、帝主催の管弦の宴にて天に澄み上る笛の音を披露した狭衣のもとに、天稚御子が現われ、狭衣に「糸遊のやうなる薄き衣」を着せる。天稚御子降下の場面である。ここで、一旦、天の羽衣がかけられた狭衣は、地上の人々とは異なる者としてありつつ、しかしながらまだ地上に属しているという、地上と天（月の都）との境界、中間に位置している状態[2]であった。ここでは帝と東宮の引き止めによって天稚御子は狭衣を伴うことを断念して帰還する。しかし狭衣がいつしか月の都へと行くのではないかという「あやふさ」は依然解消せず、地上にいながら、未だ「境界」の者である狭衣を確実に地に留める

べく、帝は鍾愛の女二宮を降嫁させようと考え[3]、

みのしろも我脱ぎ着せん返しつと思ひなわびそ天の羽衣

（巻一、上・五一）

と詠む。帝の要請には、天地の境界人である狭衣を地に置くには、それ相応の娶が必要であるという思念が強く窺える。それゆえ、「天の羽衣」の代償として「みのしろ」＝女二宮が浮上してくるのであり、ここにおいて、形ある「衣」が、喩としての「衣」にずらされたことが確認される。しかも、その際、「衣」の響えがほかでもない、娶・女性としての意味を担っていたことは、狭衣の超人性を裏付ける天人降下に添った、巧みな仕掛けであった。

ここで、「衣」を娶・女性の喩とすることにおいて、遥か『万葉集』にて、最も特徴的な恋にかかわる衣とともに、女性が機を織り布にし、染め、縫い、肌に着るものであり、おのずからその衣自体が着用する女性を表わすこととともなった[4]という、女性と衣との強い結びつきが想起されるのではなかろうか。重ねて、集中度々窺える、衣である愛しい女性を着たいと詠む歌々の存在も、基盤として伏流する引用として読み取ることができるのではないか、と思われる。一例を挙げるとすれば、「紅の深染めの衣を下に着ば人の見らくにほひ出でむかも」（巻十一　二八三九）「かくにのみありける君を衣にあらば下にも着むと我が思へり」（巻十二　二九七六）などであろうか。そうした裏打ちが、「衣」の娶・女性の喩としての意味を、よりしっかりと支えている、と考えられよう。

さて、この「糸遊のやうなる薄き衣」―「天の羽衣」について、しばし振り返ると、『竹取物語』にてかぐや姫が昇天の際に身にまとうことは言うまでもなく、さらには、『伊勢物語』一六段紀有常娶の詠「これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ」の「天（あま）」と「尼」との掛詞や、『源氏物語』での浮舟の竹取引用及び最終歌「あまごろもかはれる身にやありし世のかたみに袖をかけてしのばん」（手習巻）より、「尼衣」＝「アマゴロモ」という、ことばの響きを通して「天の羽衣」が「尼衣」との関係と重層へと繋がっていくものであったことが辿られる[5]。

そうした、殊に女性たちと強く結ばれる「天の羽衣」（「アマゴロモ」）が狭衣に着せかけられた、ということにいま一度注意を払いたい。狭衣が、他でもない、「天の羽衣」を媒介としつつ、かぐや姫―浮舟に繋がるもの[6]としてあった、ということは、狭衣は「天の羽衣」により、超人性と罪[7]を有しながら、男／女の越境、性差の無化及び解体を前提[8]に『狭衣物語』前史を引継ぎ、引き受けようとするのであろうか。そのような淵源への問いかけが立ち現われてくるのである。

「天の羽衣」はまた、いわゆる「天人女房譚」にて、天女が隠された羽衣を発見し、それをまとって天に帰るという役目を持つ「天女の」衣であって、狭衣が一旦羽織った「糸遊のやうなる薄き衣」とは、「天人女房譚」の変形を思わせる表現[9]、そのイメー

ジを誘発させる「衣」として描写されていたことも、ここに考え合わせられるところであろう。

とすれば、はしなくも「糸遊のやうなる薄き衣」―「天の羽衣」は、それをまとう狭衣の、女性性をともなったやさしい美を照らし出しつつ、その両性具有の美より、狭衣自らの聖性[10]、もしくは、いま最後の少年の時間にとどまる狭衣の、少年／大人の境界にて、天稚御子と響き合う「童」として幻視される[11]両性美の聖性[12]を証し立てるものであったと、読み取ることも可能かもしれない。

物語の歴史を辿れば、狭衣のかぐや姫引用にあたり、「八月十五夜」「形見の衣」「文」「不死の薬」などかぐや姫を表わすさまざまな要素や記号[13]から、「月の都[14]」（不在であるが）とともに、まさに「天の羽衣」が選び取られたという意味は予想を越えて遥かに大きい。狭衣自身の聖性や両性的美質を語り添えつつ、「かぐや姫―浮舟」という方向より『狭衣物語』前史を浮かび上がらせるのであり、同時に、「衣」を軸とし、モチーフとするこの物語の表題となる、「狭衣」の表現へと流れゆく、その「衣」表現の嚆矢としてもあったのである。まさに、「天の羽衣」はその、連結と始発の記号として、結節点として登場すると見て取れよう。

二、「少女の袖」の意義―そして「狭衣」へ

さて、再び帝詠「みのしろも我脱ぎ着せん返しつと思ひなわびそ天の羽衣」に立ち戻り、「みのしろ」からの「衣」の表現の広がりを見てみたい。帝が女二宮を「みのしろ」として詠じたことによって、絶えず源氏宮を思う狭衣は、ひとり密かに源氏宮を「武蔵野のわたりの夜の衣」と譬え、「衣」の喩は伸張、展開し始めるが、ここで、狭衣は自身の心中を明確には帝に告げえず、新たに源氏宮をも「衣」になぞらえたことによって、この帝の「みのしろも」歌に、曖昧かつ両義的な歌を返すのである。

心ときめきしておぼゆることなれど、いでや武蔵野のわたりの夜の衣ならば、替へまさしてもやとおぼえまし、と思ひぐまなき心地すれど、いたう畏まりて、

紫のみのしろ衣それならば少女の袖にまさりこそせめ

と申されぬるも、何とかは聞き分かせたまはん。何も向ひの岡は離れぬ御仲どもなれば、いとよかりけり。

（巻一、上・五一）

源氏宮は母方の従妹、女二宮は父方の従妹にあたり、「何も向ひの岡は離れぬ御仲ども」、どちらも狭衣自身にとっては間違いなく確かに「ゆかり」の女性である。狭衣詠の「紫のみのしろ衣」は、狭衣にとっては、最愛の源氏宮であってほしく、帝からは女二宮である、という危うい両義の「衣」なのである。[15] 狭衣にとっては「源氏宮」という〈衣〉なのであり、ここで「女二宮」という〈衣〉と比される形で、源氏宮が〈衣〉としての譬えを「武蔵野のわたりの夜の衣」→「紫のみのしろ衣」と、確実なものとする過程が看取できる。ただし、あくまでも「天の羽衣」に相当す

るのは女二宮と信じる帝との隔たりを物語は詳らかにすることはない。しかし、語らず留保、韜晦することによって、二人の女君のどちらもが、狭衣にとって〈衣〉と言われる存在としてあり続けることを可能にしていたことこそ、「後の女二宮との関係において重要な意味を持っていた」[16]のであった。

そうした「紫のみのしろ衣」の両義性を確認したところで、先の「天の羽衣」の解読を考え合わせつつ、「紫のみのしろ衣」と並び比べられる「少女の袖」について触れてみたい。

「天の羽衣」とはまた、天人がその袖で岩を撫で尽くすまでを単位とする、周知の「劫」の時間として、悠久の時の流れを語る際にあった。その「天の羽衣」が「少女の袖」と言い換えられるのは、例えば「君が世は天の羽衣まれにきて撫づとも尽きぬ巌ならなん」（拾遺集・賀・二九九）「功きなき巌の果ても君ぞ見むを」とめの袖の撫で尽くすまで」（同・三〇〇）の二首続きの顕著な例を挙げることができ、この物語でも極めて自然に表現を変えたもの、と言える。

そうでありつつ、「天の羽衣」が狭衣自身により「少女の袖」と言い直されることは、昇天にまさる源氏宮（女二宮）の意であると同時に、先に女性との結びつきについて触れたが、やはりその「天の羽衣」が、天つ少女の着るもの、として捉え返され、再認されたことを示していよう。狭衣は、天つ少女の着るべき衣を着せかけられたと換言できよう。とすれば、源氏宮（女二宮）が「少女の袖」に優越する、と狭衣自らが詠むことは、天界よりも女君を選び取る、という表明であると同時に、それは「天の羽衣」―「少女の袖」、天つ少女の衣に別れを告げ、狭衣は自らの着たそれより離れ、おのずと自身を「女」と分化し、境界にあった時間から脱するのかもしれない。狭衣は、初めてその「あわい」から分かたれるのではあるまいか。両性美を有していたとしても、天女に加えて、五節の舞姫、文字通り少女を表わす、「少女」の袖は、やはり、これから狭衣が着るべき衣ではないことを表わしつつある言説だったのではあるまいか。

「天の羽衣」は、物語が狭衣を女君たちとの恋に導きつつ、「衣」のあり方を主題と関わらせていく、その表現の起点であったことも、ここに気づかされる。帝との贈答を通しての狭衣の境界性の確認とその分化、そして表現の面では、物語内での「衣」の表現の拡張という二重の機能が、「天の羽衣」―「少女の袖」の表現の紐帯と連動の上に折り重なっているのである。その「衣」の表現の拡張とは、「夜半の狭衣」を先取りすれば、「天の羽衣」→「みのしろ衣」（女二宮）→「武蔵野のわたりの夜の衣」（源氏宮）→「紫のみのしろ衣」（源氏宮・女二宮）→「夜半の狭衣」（源氏宮）と続くものなのである。[17]「天の羽衣」が、女二宮を介して、源氏宮をも「衣」として位置づける。そうした表現の蓄積を基底に、「狭衣」の語が押し出されていくのである。

いろいろに重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜半の狭衣

（巻一、上・五三―五四）

そして、「夜半の狭衣」＝源氏宮とともに、女二宮＝「みのしろ衣」、の二つの〈衣〉の喩はそれぞれ定着していく。

・女二宮

（堀川大殿）「かの御けしきありしみのしろ衣は、いとかたじけなきことにこそ。その後、内々にも案内申さぬは、いとかひなきやうなりやと。…」（巻一、上・六六）

（狭衣）「あなむつかしや、ありはつべくも思はぬ世に、さやうのことをさへひきかかづらはんよ、と聞くに、さこそ、暑かはしき夜の衣なりける。（巻一、上・六六）

・源氏宮

九月一日頃に、なほしものに、中将の君は中納言になりたまひぬ。ありし狭衣の後は、いとど物のみゆゆしう思されて、…（巻一、上・一〇三）

とりわけ、狭衣が、女二宮を「暑かはしき夜の衣」とするのは注目されよう。これまで、「武蔵野のわたりの夜の衣」「夜半の狭衣」と、「夜」の衣とは源氏宮であったからである。

父堀川大殿より女二宮に文を贈るよう促された狭衣は、女二宮降嫁がその場限りの、地上に狭衣を引き止めるためにあった言説から、それが現実して迫ってくることを感じ取る。女二宮を妻として考えることを余儀なくされた表現として「夜の衣」が見受けられるのである。暑い夏の折、「暑かはしき夜の衣」と実際に女二宮の美しさを見ていない段階では、喩の上で拒否していることに留意しておきたい。

また、源氏宮を思って詠じた「狭衣」は、「ありし」を伴うことによって、「狭衣」という語とともに、源氏宮を〈衣〉として譬えることを確認し、また物語内引用がなされることによって、その「夜半の狭衣」歌が、一回性のものとして刻印されることを示してもいよう。[18]

こうして、女二宮、源氏宮ともに狭衣の視点から、「衣」に譬えられて語られるのであるが、喩としての「衣」が表現を伸張させ、定位していくのに対し、狭衣は実際には路上で出会った飛鳥井女君と衣を「隙なくうち重ね」る日々へと入っていくことは言うまでもない。

「かやうの歩きは、習はざりつるを。人やりならぬわざかな」とて、濡れたる御袖を解き散らして、隙なくうち重ねても、（巻一、上・一二一）

「いろいろに」ではなく「隙なく」であるが、「重ねては着じ」に対するかのように、「うち重ねて」という表現が使用されていることに即座に目が止まるところであろう。

また、飛鳥井女君においても、「小夜衣」という表現を伴って狭衣との恋が語られることも、よく知られるところである。

（狭衣）「あひ見ねば袖濡れまさる小夜衣一夜ばかりも隔て

ずもがな

（飛鳥井）いつまでか袖干しわびん小夜衣隔て多かる中と見ゆるを

また、ある本に、

夜な夜なを隔て果てては小夜衣身さへうきにやならんとすらん　（巻一、上・一二一―一二二）[19]

「衣」という語が使用されることによって、源氏宮、女二宮のことがすぐさま連想されるとともに、飛鳥井も、身分の劣る忍びの女ながら、そうした狭衣を囲む女君たちの一人としての位置を占め始めたことを垣間見ることができる。喩としての「衣」が女二宮・源氏宮でありつつ、実際に重ねる飛鳥井の「衣」。喩の「衣」と形ある「衣」とがずれる、その「ずれ」を使い分けることが、狭衣のそれぞれの女君たちへの思いをはっきりと描き出している。

三、「みのしろ衣」の行方―女二宮と衣

見てきた通り、狭衣はまだ見ぬ女二宮に興味を示してはいなかったのであったが、巻二にて、宮の姿を目にするなり、事情は異なってきた。そして、女二宮のもとに近づいた狭衣は、宮の美しさを見るにつけ、「夜半の身のしろ衣」を帝の意向を指す表現として頼りにするのであった。

かの夜はの身のしろ衣、さりとも思しかへさんやはと、頼もしきにも、苔の乱れまさりつつ、　（巻二、上・一七三）

「身のしろ衣」は、もともと天の羽衣の身の代「衣」として女二宮を指すことばであり、前に触れたように、狭衣は帝の歌にあったそれを一旦、心中にてひとり「紫のみのしろ衣」として源氏宮を表すものと決めていたのであった。しかし、初めて女二宮を見、その美しさにとらわれた狭衣は、天稚御子降下の折の帝詠に添って、再び、源氏宮から女二宮へ、その意味をもとに戻し、みのしろ衣＝女二宮である、帝のご意向はお変わりないはず、と頼みとしまうのである。まさに、狭衣の心内での「みのしろ衣」の両義性が利用された形となっている。

ここで、「衣」の意味を、狭衣自身が自ら、帝詠に帰して、少女の袖に代わる女二宮という、初めの意味に戻したことは、源氏宮の絶対的存在はそのままでありながら、狭衣は女二宮という「衣」を着ようとする、という微妙な関係の在り方を表象するものではないかと考える。事実、狭衣は源氏宮を思慕する一方で、女二宮との逢瀬を持ち、狭衣が物語の最終場面まで女二宮に執着し続けることは周知の通りである。かつて、狭衣にとっては、女二宮は「暑かはしき夜の衣」であり、天の羽衣にまさるもの、相当するものとしての「みのしろ衣」ではなかった。しかし、いまや、女二宮は狭衣をひきつけてやまない女君と転じたことを、狭衣自ら「かの夜はのみのしろ衣」の言説に寄り掛かろうとする姿勢が、際やかに指し示しているのではなかろうか。

さて、その後の女二宮と「衣」とのあり方もまた興味深い。

とどめきこえつと思ひつれど、あまた重なりたる御衣ばかりぞ残りたりける。口惜しう心憂くと思へば身よりほかにつらき人なく、悔しういみじきに、御衾も押しやられ、残りたる御衣の匂ひばかりは変らで、…　（巻二、上・二三六）

女二宮は未婚ゆえ密かに狭衣の子を出産し、ただちに出家、いまや尼となっている。しかし狭衣は、宮のもとに忍び込む。宮は狭衣の薫りを感知してすばやく逃れた。狭衣が目にしたのは、宮がすべり出たあとの、「あまた重なりたる御衣」であったのである。

女君が衣一つ取って男君の侵入から逃れるあたり、『源氏物語』の空蟬との関係、賢木巻で藤壺が光源氏に衣と髪を残す場面との重なり[20]より読み解かれるところであるが、さらに加えて、狭衣が女二宮を追い求め、あとに残った衣を被って泣く、というその有りよう自体を、再び顧みてみたい。

ここらの月ごろ、我は知らず顔に心とけて明かす夜な夜なもありつるは、我ながらだに恨めしういみじきに、このとどめたまへる御衣をひき被きて流しそへたまふ涙ぞ、吉野の滝にもなりぬべかりける。　（巻二、上・二三六）

巻一にて帝からの宮降嫁の要請については、狭衣は、源氏宮思慕ゆえ、「衣」と喩される女二宮を「着る」ことを受け入れたような返歌の裏で拒否していた。しかしながら、巻二に入り、女二宮の容姿を窺うやいなや、その〈衣〉を狭衣は秘密のうちに自身に引き寄せようとする。さらにいま、狭衣は出家した女二宮その人を追い続け、実際には、宮の着ていた「衣」をその身にひき被って泣くという、著しく異様とも取れる状態にあるのである。

源氏宮の存在ゆえに女二宮という〈衣〉を遠ざけつつ、しかしながら密かに女二宮という〈衣〉を着、女二宮自身の「衣」をまとって悲嘆する、という狭衣の姿は示唆深く受け取れる。「みのしろ衣」より紡ぎ出された「衣」ということば、その喩としての衣に実際の宮の衣が加えられることによって、喩と、形ある衣双方の〈衣〉の描き分けと重なりより、物語での「衣」は、より効果的に、あやにくな様相で狭衣と女二宮との間をとり結ぶのである。

このとき狭衣が身に被った女二宮の「衣」は、のちに「かの、ありし」の語を伴って再び語られる。狭衣が女二宮主催の法華八講の夜に、仏前の女二宮をいま一度追いかけるのである。「衣」は、もはや代償行為とは呼べない狭衣の女二宮に対する苦悩の恋を語るもの、[21]として定位されているのである。

…冠の影のふと見ゆるに、物もおぼえさせたまはず、仏の御前の障子の内に入りて、引き立てさせたまふも、わななかれて、とみにぞ立てられぬ。かのありし寝覚めの床に、濡らし添へたまひし、捨て衣思し出でられたまひて、…　（巻三、下・一七七）

狭衣は、かつて宮の残した衣をひき被った当時を思い起こすことによって、女二宮をさらに追い求め、この箇所ののち、宮の手や

袖をとらえることとなる。女二宮が実際に着ている「衣」、それも「尼の衣」に執着することとなるのである。

一方、そうした狭衣の側からの「衣」は、女二宮自身にとっては、狭衣に「尼の衣の裾ばかりも、手馴らしたまはじ」と思い、つらい現実に宮は「浅ましく、憂き身の、今まで長らへける」、「(仏二)とく迎へさせ給へ」(巻三、下・一八七)と、いっそう来世への願いを強め一心に祈るばかりであった、ということへも、まなざしを向けるべきであろう。巻一にて〈衣〉と女二宮が響えられたことは、源氏宮の「狭衣」とともに、いま触れたように物語内に長く底流していることが知れるが、女二宮を〈衣〉とすることは、嵯峨帝そして狭衣の側からの、男君からのとらえ方であったことを、女二宮は尼の衣を身に、申し立てているのである。

四、濡衣—女君たちの新たな位置づけ

巻三では、新しい〈衣〉の喩、しかも狭衣がいつのまにか世人より着せられている、「濡衣」が見られる。

一品宮邸のもとに、飛鳥井女君腹の姫君が引き取られている、と聞いた狭衣は、我が子を一目見たいと宮邸に忍び入るのであったが、その姿を見顕され、一品宮との間に噂が立ってしまうのである。いよいよ宮との結婚は余儀なくされ、狭衣は宮に文を送るが、その歌の中に「濡衣」と詠むのである。

思ひやる我が魂や通ふらん身はよそながら着たる濡れ衣

とある書きざま、手などはしも、げに、内親王たちにおはすとも、いかでかと見えたり。いかなる心にて、かく濡れ衣にしもなしたらんと、なほ涙のみこぼれさせたまふ、さもぞ、いといとほしう見たてまつる。　(巻三、下・八四)

一品宮の母・女院も、狭衣の歌より二人の浮名を「かく濡れ衣にしもなしたらん」と受け、繰り返している。[22] 狭衣詠にて「濡衣」の語が初めて見られることは、弁解の試みの表現であると同時に、一品宮との件を〈衣〉を用いて象るという仕組みであったことは言を俟たない。[23] そして、この〈衣〉は、先の女二宮・源氏宮を示した〈衣〉とは異なり、狭衣より「濡衣」の表現がなされた時点で、すでに狭衣はその〈衣〉を着ている状態にあるのである。一品宮の件は事実ではない、しかし、簡単にはとり除けない、そうした事態の在り方、宮との関係を、濡れた〈衣〉が象るのである。

この〈濡衣〉に対するものとして、狭衣詠の「我が魂」が注目される。〈衣〉は着つつ、自身の魂は別である、と主張するものであり、この、〈衣〉と魂をとを分別し、乖離させるあり方は、一品宮は狭衣にとって、〈衣〉でありつつも、狭衣の求める〈衣〉ではないことをも申し立てている。

その上で、狭衣は、同じことであれば女二宮に忍んだ時に噂が立ったのであれば、と女二宮との浮名という「濡衣」、〈衣〉を着せてほしい、と過去を振り返るのである。

「…心ゆかずながらも、逃れがたかりければこそは、思ひか

けざりし濡れ衣も干しわびて、我もかくまで思しなりにしか、など過ぎにし方の、[illegible]を見あらわす人のなかりしこそ、…」

同じくは着せよなあまの濡れ衣よそふる方に憎からずとや

（巻三、下・一三三）

「思ひかけざりし濡れ衣」＝一品宮との件よりも、「あまの濡れ衣」＝尼である女二宮との、濡れ〈衣〉を望むと悲嘆する。この構図を巻一の「天の羽衣」をめぐる〈衣〉の在り方と比較すれば、「天の羽衣」にまさるのは、源氏宮という「紫のみのしろ衣」であり、女二宮という「みのしろ衣」ではない、と狭衣の思いは源氏宮思慕に貫かれた明確なものであったはずであった。しかしながら、女二宮との逢瀬、宮の出産と出家を経て、いま、尼である女二宮への執着を深める狭衣が着たいのは、女二宮という〈衣〉であると主張する。ここでは、現在も源氏宮は絶対の地位を保ちつつ、女二宮と一品宮が比較され、かつての源氏宮の位置に女二宮が、そして女二宮の位置には一品宮が定位する、という形となっている。〈衣〉をめぐる喩は、狭衣の微妙な女君たちへの思いを、変動を経てのち再び表徴する、と窺い知れる。また、「あまの濡れ衣」を「着せよ」という譬えは、狭衣が、女二宮を追い求め、宮の残した衣をまとって泣き伏す、という、先に見たような実際の衣にまつわる事実を、喩のレベルから後押しし、確認するもの、と言えそうである。

求めない「衣」が着せ掛けられ、かつて「求めない」としていた「衣」をいま求めるという姿には、狭衣の恋と挫折が見受けられるが、その中で、さらに新たな女君が登場する。ただ、そこに付して現われる「衣」は、もはや女君自身の「衣」からも女君そのものという喩からも離れた、「狭衣の」衣であったのである。

五、それぞれの「衣」

日数の過ぐるままにも、有明の月影は面影に恋しうおぼえたまひて、忍び歩きもことにしたまはず、夜の衣を返し侘び給ふ夜な夜な、さすがにあやしう思さるれば、

片敷きに重ねし衣うちかへし思へば何を恋ふる心ぞ

（巻四、下・二九〇―二九一）

ここでの「夜の衣」の表現が、狭衣自身の衣であることに十分留意したいが、「夜の衣」には、やはり、斐及び女性のイメージが付随することは間違いない。狭衣にとって、「夜の衣」とは、かつては源氏宮、女二宮であったことがすぐさま想起される。しかし、どちらもいまや「夜の衣」とはなりえない身分、状況にあり、狭衣は、源氏宮に酷似する新たな美しい女君、宰相中将妹を思い、自身の「夜の衣」を返し、「片敷きに重ね」ているというのである。女君を恋い慕う有りようが、小野小町の「いとせめて恋しき時はぬばたまの夜の衣を返してぞ着る」（古今集・恋・五五四）でつとに知られる衣の表現の中に見て取れるものの、これまで物語が

その当初より築いてきた、女君自身や女君との関係を〈衣〉そのもの、とする喩の在り方とは異なっていることが看取できる。

宰相中将妹は、狭衣が自ら喪とする、これまでの〈衣〉の響えからすると、まさに進んで〈衣〉を着る、狭衣にとっては確実に〈衣〉である、という役割を担った女君である。その女君だからこそ、かえって〈衣〉の喩が遠ざけられている、という仕組みを読み取りたい。物語は狭衣が自分の衣を返すという描写をしつつ、狭衣が進んで重ねる〈衣〉、その女君に、衣の喩を用いなかったのである。物語の、表現への配慮を窺い見ることができる。

そして、これまで連なってきた物語の〈衣〉の方法の行方は、女二宮思慕に継続されている。物語終末部、狭衣が女二宮の袖をとらえ、御簾に半ば入る、という場面まで続く。

消えはてて屍は灰になりぬとも恋の煙はたちもはなれじと、のたまはするままに、御簾のうちに、なから入らせたまひて、御袖の裾を引き寄せて、泣きかけさせたまふ御涙の滴の所狭さも、恐ろしうわりなきに、（巻四、下・四〇九）

物語当初は一旦、女二宮という〈衣〉を着ることを拒みながら、女二宮の着用する「衣」も、女二宮という〈衣〉をも追うようになった、という狭衣の宮に対する心境を辿るとき、狭衣が宮の尼衣の袖をとらえる、という姿に、象徴的にその軌跡の集約を見ることができるのではあるまいか。

結

「衣」は、喩と現象の双方より、一人一人違う物語を紡ぐ女君たち、そして狭衣とを描く。その中で「衣」は、天界と狭衣・女君と狭衣、あるいはまた、物語を縦に見れば女君と女君とを、繋ぎながら同時に隔てている、という言い方もできようか。

改めて「天の羽衣」に遡及して辿り直してみたとき、喩としての衣と形ある衣との連動、また、そのずれや乖離によって、互いの性質が響き合いながら、「衣」が登場していたことに気付かされる。繰り返しになるが、例えば、形ある「天の羽衣」は、物語前史や狭衣の成長を象ることをも含めた多義的な在り方より出発し、そこから喩としての「狭衣」が導き出されたのであり、しかし、実際には飛鳥井女君と衣を重ねてゆくのであった。

「衣」の重要な役割を思うとき、絶えず「あくがれ」ようとする狭衣の魂は、魂の入れ物[24]である「衣」（女君たち）に抱き取られることはない―そうした狭衣の魂の彷徨の有りようとも密接に関わって、「衣」の存在が考え合わせられる、と最後に申し添えることもできようか。

（注）

（1）井上真弓「『狭衣物語』の楽とうた声―共振する世界と更衣の意味をめぐって―」（『叢書 想像する平安文学』8 勉誠出版、平13）が詳細に論じる。「忍ぶ振摺」「萩の花摺」などをめぐる

寺見、

(2) 深沢徹「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造（上）―陰画としての『無名草子』論―」（『文芸と批評』昭54・12）、井上眞弓「視線の呪縛―『狭衣物語』の方法にふれて―」（『立教大学日本文学』昭57・7）

(3) 『狭衣物語全註釈』Ⅰ（おうふう、平11、以下全註釈と略す）一八〇頁。

(4) 「衣」『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、平11）

(5) 今井源衛「浮舟の造型―夕顔・竹取」（『文学』昭57・7）、小林正明「最後の浮舟―手習巻のテクスト相互連関性」「日本文学研究論文集成6 源氏物語1」若草書房、平10）

(6) 鈴木泰恵「浮舟から狭衣へ―乗り物という視点より―」（『駒沢女子大学研究紀要』平11・12）は乗り物より浮舟と狭衣をふたりの〈かぐや姫〉として鋭く考究する。

(7) 深沢徹「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造(下)―陰画としての『無名草子』論―」（『文芸と批評』昭55・5）、井上眞弓「『狭衣物語』の構造私論―親子の物語より―」（『日本文学』昭57・10）

(8) 小嶋菜温子「浮舟と〈女の罪〉―ジェンダーの解体」（『源氏物語批評』有精堂、平7）、光源氏もまたかぐや姫であったことは、同書「光源氏とかぐや姫―須磨・明石そして桂へ」参照。

(9) 全註釈．一六三頁。

(10) 立石和弘「『女にて見奉らまほし』考―光源氏の容姿と両性具有性」（『国学院雑誌』平3・12）は両性具有と聖性との密接な繋がりを光源氏に見ている。

(11) 田村良平「『狭衣物語』・説現実の幻想―超常現象を中心に―」（『中古文学論攷』昭63・12）、鈴木泰恵「狭衣物語の時間と天稚御子事件―時間の二重化と源氏物語の異化をめぐって―」（『源氏物語と平安文学』3 早稲田大学出版部、平5）

(12) 注（10）に同じ。

(13) 久富木原玲「天界を恋うる姫君たち―大君・浮舟物語と竹取物語」（『源氏物語 歌と呪性』若草書房、平9）の精確な解明による。

(14) 阿部好臣「狭衣物語主題攷―月と心深しの構図」（『国文学研究資料館紀要』昭60・3）は月がないことを指摘、鈴木泰恵「『狭衣物語』と法華経―〈かぐや姫〉の〈月の都〉をめぐって―」（『国文学解釈と鑑賞』平8・12）は〈月の都〉に至り得なかった狭衣の姿を説く。また神野藤昭夫「散逸物語『霞へだつる中務宮』の復原（散逸した物語世界と物語史）」若草書房、平10）は〈笛の音〉と〈月の都〉にかぐや姫はもとより『霞へだつる中務宮』の影響も指摘する。

(15) 注（11）鈴木論文、及び全註釈 二〇四頁。

(16) 全註釈 二〇四頁。

(17) 斎木泰孝「狭衣物語における竹取物語と隠れ蓑物語―「天の羽衣」と「蓑代衣」と「隠れ蓑」―」（『安田女子大大学院・博士課程開設記念論文集』平9・3）は天の羽衣と蓑代衣が「狭衣」に繋がると論じる。

(18) 豊島秀範「〈衣〉の系譜―狭衣・小夜衣・苔の衣―」（『弘前学院大学紀要』昭57・3）が「狭衣」について詳しい。

(19) ここの歌は諸本異同が激しく三句目「小夜衣」のみ一致する。

(20) 注（1）に同じ

(21)（22）倉田実「〈藤衣の恋〉の狭衣―一品の宮の物語」（『狭衣の恋』翰林書房、平11）が詳細に論じているので参照されたい。

(23) 注（21）（22）の倉田論文は、一品宮邸で養育されている実娘飛鳥井姫君に会いたかったゆえと想定している。

(24) 魂と衣の関係については、折口信夫「大嘗祭の本義」、石上堅『日本民俗語大辞典』（桜楓社、昭58）四六三頁など。

＊本文は小学館新編日本古典文学全集『狭衣物語』①②を使用した。

（どい　たつこ　岡山大学大学院文化科学研究科）

研究室受贈図書雑誌目録Ⅳ

高知大国文（高知大学国語国学会）　三一

甲南国文（甲南女子大学国文学会）　四八

語学と文学（群馬大学語文学会）　三七

国語学研究（東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会）四十

国語学研究と資料（早稲田大学　国語学研究と資料の会）　二四

国語研究（横浜国立大学　国語・日本語教育学会）　十九

国語国文学（徳島大学国語国文学会）　十四

国語国文学（福井大学国語学会）　四十

国語国文学（目白大学短期大学部国語国文学研究室）　十

国語国文学会誌（新潟大学人文学部国語国文学会）　四二

国語国文学研究（熊本大学文学部国語国文学会）　三六

国語国文学誌（広島女学院大学日本文学会）　三十

國語國文研究（北海道大学国語国文学会）　一一七、一一八、一一九

国語国文論集（安田女子大学日本文学会）　三一

国語の研究（大分大学国語国文学会）　二七

国語表現研究（国語表現研究会）　十三

国際児童文学館紀要（大阪国際児童文学館）　十六

国文（お茶の水女子大学国語国文学会）　九五

国文学（関西大学国文学会）　八二

国文学研究（群馬県立女子大学国語国文学会）　二一

国文学研究（早稲田大学国文学会）　一三三、一三五

国文学研究資料館報（国文学研究資料館）　五六

国文学研究資料館紀要（国文学研究資料館）　二七

国文学研究ノート（神戸大学「研究ノート」の会）　三六

國文學攷（広島大学国語国文学会）　一六八、一六九、一七〇

国文学論究（花園大学文学会）　二八

国文学論考（都留文科大学国語国文学会）　三七

國文學論叢（京都大学大学院文学研究科国語国文学研究室）　六

國文學論叢（龍谷大學國文學會）　四六

国文研究（熊本県立大学日本語日本文学会）　四六